

椿とともに



北川由希恵
煙る花
2022年



田中やよい
彼らの木
2018年



南野和
庭を歩く
2021年



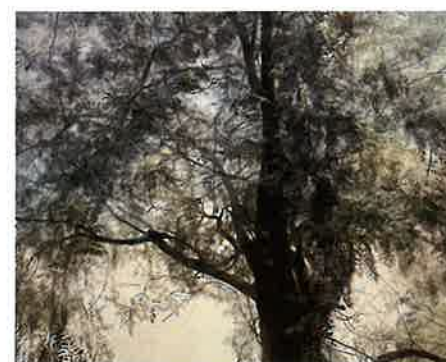
乙部亮
空
2022年



工藤彩
消像
2019年



中田日菜子
森
2023年



森花
化ける者
2022年

特集展示「椿とともに」 —金沢美大「日本画^{セブン}7人」展

「椿、咲く」と銘打った「あいおいニッセイ同和損保コレクション」の椿絵の名品48点とともに、金沢美術工芸大学大学院で日本画を学び近年修了した7人の作家たちによる自然にまなざした作品を、同じカレードの空間に特集展示します。

乙部亮は野放しの広い草原に野生の輝きを追求し、北川由希恵は野に咲く草花が持つ時間と清明さを掬いとっています。工藤彩は珊瑚や庭の植物が刻一刻と移り変わる定めをみつめ、田中やよいは動植物たちの命との交歓から得た慈しみを絵にしています。

また中田日菜子の絵は、自ら飼育する動植物との日常でのリアルな関わりから生まれます。南野和の作品は、庭を歩きながら思索した観想と向き合い続けたもの。森花は、人の気配をまとった植物の在り様を拾うように描いています。

7人の作家たちが、それぞれ独自の方法で向き合い培った自然の生命との抜き差しならない関係は、先達たちによる椿絵のつややかな生命の輝きとも呼応する絵画空間へと昇華しているように思います。2つの展示から生まれるハーモニーをお楽しみいただければ幸いです。



岸田劉生
籠椿
1924年(大正13)



北大路魯山人
色絵椿文鉢
1935-44年(昭和10年代)



酒井抱一
菖椿鶯図扇子
18-19世紀(江戸時代)



富田溪仙
春の花籠図
1930-31年(昭和5-6)



尾形光琳
紅椿図団扇
18世紀(江戸時代)



尾形光琳
椿図時絵硯箱
18世紀(江戸時代)



尾形乾山
色絵椿文輪花向付
18世紀(江戸時代)

椿は日本を代表する花木ですが、冬の寒さに耐え、春に先駆けて花開くこの花はことに北陸地方では身近なものとして親しまれ、野々市市の市花木ともなっています。また、その葉は常に緑をなすなど、すぐれた繁殖力をみせるその強靱な生命力に私たちの祖先は「安寧と繁栄」への希望を託してもきました。

美術に表わされた椿は、室町時代の花鳥図などに早い作例が見出せますが、工芸の意匠にはさらに古いものがあります。そのうち江戸時代から現代に至るまで、実に多くの美術家たちがこの椿に魅せられ、絵画や工芸作品が創作されてきました。

本展は、椿絵の収集で知られる「あいおいニッセイ同和損保コレクション」のなかから、江戸時代の琳派を代表する尾形光琳、乾山らによる絵画や工芸作品や、近代の竹久夢二、岸田劉生、さらには小倉遊亀や高山辰雄、堀文子など現代の巨匠たちが描いた椿絵の名品を選び、[いしかわ百万石文化祭2023]の一環として開催するものです。椿の花のつややかな美しさで寿ぎ、この先皆様の吉祥の魁となればと願うものです。

椿、咲く



竹久夢二
舞妓
1915-20年(大正中期)